

11.20

＜第三種郵便物認可＞

「文明間の戦争」ではない

アメリカで起きた同時多発テロやその後のアフガニスタンへの全面的な攻撃といった世界の今日的危機について、論点もほぼ出尽くした感がある。しかしアメリカの苦境を斜めに見て、みずからの二十一世紀戦略を着々と固めようとしている中国のしたたかな姿については、まだ十分に照らし出されていない。

テロが起こったとき、北京の学生の一部が大喜びしたとか、訪米中の中国の地方テレビの記者たちがテロのテレビ画面を見て拍手喝采し、米國務省から退去を命じられたとかいった情報が正しいとすれば、そのことも今日の中国の立場を如実に反映している。

一部には「文明の衝突」が「文明間の戦争」をもたらしただのだからという見方があるが、それは決定的な誤りであって、邪悪なテロを文明にまで昇格させてはならない。

今回の事件をめぐってしばしば語られる「文明の衝突」は、周知のように、ハーヴァード大学のサミュエル・ハン

ティントン教授が『フォーリン・アフェアーズ』誌の一九九三年夏号に書いた論文に由来する。この論文に関しては、アメリカでも日本でも賛否両論があり、どちらかという批判的な意見の方が多か

中国の「したたかさ」警戒せよ

ったけれど、私自身はハンティントン論文に当時からかなりの共感を覚え、特に「文明の衝突」を起こしかねない「儒教・イスラム・コネクシヨン」への注意の喚起には、大賛成であった。

計算された二重戦略的立場

それはハンティントン教授

が当時すでに軍事的に肥大化しつつあった中国の存在に触れ、中国がリビアやイラクに核兵器や神経ガス物質を輸出していること危険性を警告して、これからの世界では西

党独裁国家を指しており、日本や台湾はそこに含まれないばかりか、日本は一つの文明圏として位置づけられている。この予測の正しさは、今回の「新戦争」をめぐる中国のしたたかな対米牽制姿勢を

件に関し、私が英語や中国語の新聞を読んでいて興味深いのは、タリバン(Taliban)のことを中国の新聞は「塔利般」と音読みで表現しているのに、台湾の新聞は「神學士」とパシュトン語

正論



国際社会学者 東京大学長 中嶋 嶺雄

見てもうなすけよう。

中国は、一方では米国のテロ攻撃に賛成することによって自国内とくに新疆ウイグル自治区を中心とする分離独立運動分子やイスラム過激派の活動を徹底的に抑圧する権限を国際的に認知させ、他方では国連中心主義を唱えながらアメリカ主導の反イスラム原理主義戦略とグローバリズ

(SCO)で結ばれているばかりか、中国の将来の石油戦略としても注目すべきカスピ海沿岸の石油利権とも関連して重要なトルクメニスタンとも関係を深めつつあるようだ。この点でもハンティントン氏の見方は正しいといえよう。

タリバン本来の意味で表現していることである。中国ではまだ宗教の自由が完全には認められていないからであり、また自国内のイスラム過激派をこれから徹底的に取り締まるためにも、タリバンを「神學士」と訳して報ずるわけにはゆかないからであろう。

背景に21世紀睨んだ壮大な世界戦略

旬のASEAN諸国プラス日・中・韓首脳会談での江沢民主席の言動に見られたように、アメリカの反テロ軍事行動や日本の対米協調主義に決して同調しようとはしない。それは、「二十一世紀は中国の世紀」と考える中国が「米国単独覇権」への反対を基本戦略にしているからであり、今後の推移によっては、このような中国の世界戦略がより一層鮮明になるであろう。中国はAPEC首脳会議や日中首脳会談では、いかにもアジア太平洋諸国の一員として協調する姿勢を示し、またWTO(世界貿易機構)への参加によって、世界の一角としての責任を果たす姿勢を見せかけながら、他方ではロシアや北朝鮮それにモンゴルや中央アジア諸国などを連ねて、ユーラシア大陸の内側では着々と、反米同盟を固めようとしている。

これが米中「新冷戦」時代の基本潮流であり、それだけに日本は、対米協調路線をいささかも踏みはずしてはならないのである。

(なかじま みねお)